

おわりに

2020年、世界中が新型コロナウイルスの感染拡大という未曾有の事態に直面し、私たちのまわりの文化芸術もたくさんの影響を受けました。2019年度から文化庁の補助を受けて開始した「日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成～『伝統×伝統』、『伝統×現代』、『伝統×地域』のクロスオーバーによる新たな価値の創出を目指して～」も、先の予測がまったく立たないままに2020年3月の公演中止、2021年1月には受講生たちと4か月かけて作り上げてきた公演中止という苦渋の選択を迫られました。

私たちのまわりを見渡すと、中止になったのは舞台公演だけではありません。各地で伝承される伝統的な音楽・芸能の多くが、年に一度の奉納やお祭りを中止しました。練習などの集まる機会も減り、外での公演の機会もなくなる中で、もともと高齢化や後継者不足などの課題を抱えていた伝承団体の中には、何世代にもわたる伝承の灯を消すという選択をしたところも少なくありません。

日本とアジアの伝統音楽・芸能の多くは、まさに人と人とのコミュニケーションのうえに成り立っています。目の前の師匠の芸を真似て学んで習得する、互いの息遣いを感じながら間合いをはかり演じる、多くの時間を共に過ごす中で技だけではなく芸能への思いも受け継いでいく……こういった大切にしてきたコミュニケーションがこれまでどおりにいなくなった今、伝承の現場では未来につなぐための新たな対応を迫られています。

こうした状況下において、これからの日本とアジアの伝統音楽・芸能のアートマネジメントには、公演等の企画をする以上の使命がますます求められるといえます。本書では、長年にわたりこの分野のアートマネジメントを開拓されてきた世代の方々に、これまでを振り返りながらご寄稿いただきました。そこからは「アートマネジメント」という言葉が一般的でなかった時代から、担

い手・演じ手と対話をしながら、社会につながるための活動と、伝承を未来につなげるための活動の両方を大切にされてきた姿が浮かび上がってきます。本書では若手で積極的な活動を展開されている方々にもご寄稿いただきましたが、そこにもこうした精神はたしかに受け継がれています。

多種多様な日本とアジアの伝統音楽・伝統芸能のアートマネジメントは、何か一つの完成されたひな型があるものではありません。最善の方法は、それぞれの音楽・芸能によって異なるからです。さらに言うならば伝承をめぐる環境も刻一刻と変化することから、目の前の音楽・芸能の「いま」としっかりと向き合うことが大切になってきます。そのために、本書では基本的な考え方を整理すると同時に、多くの取り組み例を示すことに重きを置きました。本書を読みながらそれぞれの活動に役立ただけであれば嬉しく思います。

幸いに本事業は、多様な立場の最高の講師陣を迎えてこれまで展開することができました。事業の展開にあたって多くの「ひと」との出会いがありましたが、さらに本書で編まれた「ひと」と「ひと」との繋がりもまた、日本とアジアの伝統音楽・芸能のアートマネジメントで大切にしたいことの一つです。

三カ年の事業における取り組み、および本書の作成にあたっては、多くの皆様にご支援とご協力をいただきました。また本書の編集にあたってはひとま舎の菅生早代さんに大変お世話になりました。

皆様にこの場をお借りして、心より御礼申し上げます。

日本とアジアの伝統音楽・芸能のための
アートマネジメント人材育成事業
統括 福田裕美